―ノート―

自然環境に対する子どもたちの豊かな感性を育む実践についての一考察

A Study of a Practice to Cultivate Children's Sensibilities Toward the Natural Environment

金　谷　公　子*

（平成29年10月25日受理）

要約

幼稚園や保育園などでは様々なあり方で自然環境と関わっている。保育という教育活動を考えるときには、自然環境というのは、まさに「環境」である。しかし、そこに関わる保育者の認識や行動が重要である。子どもの驚き、発見、思い、やさしさなどを感じ取れなかったり、子どもの感性を共有する、引き出すことが困難な保育者が増えているようにも感じる。本稿では、幼稚園における生活の中で、保育者の感性がいかに子どもにとって重要な役割を果たしているか事例から考察を試みる。

キーワード：自然環境、保育者、感性
keywords：natural environment, childcare worker, sensibility

1．はじめに

幼稚園、保育所での子どもたちは、日々の生活を送るなかで、さまざまなあり方で自然環境と関わっている。その関わりは、個人的なものから小集団、そして大きな集団によるものまで幅広く、子どもたちの多様な活動をしっかりと支えるものであり、また保育にとって非常に重要な側面でもある。このように子どもたちや保育者と深いつながりのある自然環境は、本来人間の生活と一体化している。保育という教育活動を考えるときには、やはり自然環境は、まさに「環境」であり「まわりに存在するもの」である。しかし、筆者は「環境」に関わる保育者の存在が気になることがたびたびある。子どもの驚きや、発見を共に感じ取れない、また子どもの感性を引きだすことが困難な保育者が気になるのである。本研究では、子どもたちの園生活において、いかに自然環境が深く関わっているかを事例によって紹介し、子どもの感性をどのように受け止めていっているのか、そしてそこに保育者の感性がいかに重要な役割を果たしているのかを「保育実践」という視点から考察していく。

2．豊かな感性とは

幼稚園教育要領「表現」の内容の取り扱いによると、「豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること[1)]」と示されている。また、幼児はあるものに出会い、心が揺さぶられて感動すること、感じていることをそのままに表現しようとする。そのメッセージを教師が受けとめ、認めることによって、幼児は自分の感動の意味を明確にすることができるとも記されている。無藤は、「保育者が、子どもの経験していることに意味を見いださず、共感しようとしなければ、子どもの学びは深まらないだろう。身近な環境、保育者の計画を越えたところにある環境だからこそ、そこに教材としての価値を見いだし、保育に生かす感性が保育者に求められる。子どもの視点から自然環境に出会い、共に感動し、不思

（＊かなたにともこ　保育科講師　保育内容環境）

議に思うことから感性を高めていきたい[2)]」と述べている。このことから、豊かな感性は心が揺さぶられるような出来事に出会い、そこから受けた刺激や感動体験や、発見などを保育者や仲間から受け止められ、共に分かち合える温かな教師や仲間といった「人的環境」が大切であると考える。

では、実際に保育現場においてどのような実践が展開され、子どもたちが環境に出会い、保育者がどのような役割を果たしているのであろうか。次にいくつかの事例をもとにその疑問について考察していきたい。

３．保育実践事例

事例１「アリさんどうしているかな！」
―小さな生き物との関わり―

対象・時期　新入園児３歳児　Ｓ子　入園当初
場所　Ａ市Ａ幼稚園

―概要―

Ｓ子は父親と登園してくるが、父親が帰ろうとすると大声をあげて激しく泣く。担任が部屋の中に入れようと抱きかかえ部屋の中には入れるが、ますます激しくなり、泣き止む様子がない。Ｓ子自身が興味のあるような遊び、絵本の読み聞かせが始まると、少しは泣き止むものの、カバンもかけたままで表情は固く、遊び始められず幼稚園にいる間ずっとカバンをかけたままの日が何日も続いた。家に帰ると元気いっぱいのＳ子であるが、朝が来ると幼稚園にいきたがらないＳ子の様子に何かを感じた父親は、登園するとしばらくＳ子に付き合い気持ちが落ち着くのを待った。それでも教室に入りたがらないＳ子を見て、父親はＳ子を連れて園庭を散歩することにした。そこで見つけたのがアリの行列である。父親自身がどこに行くんだろうという関心をもった。以下が詳細なやりとりである。

父親：「Ｓちゃんこれなーんだ」とアリの行列を指さした。
Ｓ子：「アリさん」と言いながら少し表情もやわらかく、アリの行列を父親と一緒に見ながらアリの後をついていった。
父親：「アリさん何しているのかな」
Ｓ子：「朝ごはんみんなで食べに行って、今どこかにお出かけするところじゃない」
父親：「Ｓちゃん家に帰ったらアリさんどうしたか続きのお話聞かせてね」

Ｓ子の気持ちが落ち着いた状態を見計らって部屋に連れて行くことになったわけであるが時間的には20分程度ではあるが、何となく部屋に入りたくないＳ子の気持ちを父親に受け止めてもらったこと、アリという存在が心の拠り所となり部屋にスムーズに入ることができた。父親はこのことを教師に話した。それ以降家ではしばらくアリの話で盛り上がり、幼稚園にも喜んで通う姿が見られるようになった。その後Ｓ子に誘われて教師、他の幼児も一緒にアリを探し出す。すると年中児のＲ夫が、「アリさんのおうち知っているよ」と声をかけるとＲ夫は得意そうに案内し、「ここだよ」と場所を知らせていた。これ以降アリとの遊びはＳ子だけではなく、他の幼児たちとの楽しい遊びとなり心が満たされ、どんどん巣穴を発見していくという喜びに繋がっていった。

＜考察＞

新入園児のＳ子は始めての集団生活の中で環境の変化に戸惑い、登園時に父親と離れがたく不安な様子だった。また父親もＳ子の泣いて自分から離れようとしない様子に驚き、戸惑っている様子であった。しかし、新しい環境に馴染めないＳ子の不安な気持ちに何とか寄り添ってみようと時間を作り、Ｓ子の居場所を見つけるよう心がけた。この居場所を見つけようとする試みがアリとの出会いにつながった。アリとの出会いは、Ｓ子にとって不安な気持ちをいつの間にか忘れさせ、次のステップへと動き出させた契機となったといえる。

その翌日から、教師もＳ子や他の幼児達と一緒にアリ見つけを始めた。アリの巣を見つけてじっ

くりとアリが出入りする様子を見たり、続けてダンゴ虫を見つけたり、興味の対象は移りながらも、小さな生き物を探して、じっと見たり捕まえたりすることで、意欲的になっていった。アリとの出会いをきっかけに、小さな生き物への思いがＳ子の行動範囲を広げ、同じ事に興味をもつ友達やＲ夫との関わりのなかから４歳児との関わりへと広がっていくことにつながっていった。

３歳児の担任は、この父親の姿から、幼児の姿に寄り添いともに歩むことの大切さ、小さな出来事を見逃さないで共有できる感性、それに気づくためには時間や心のゆとり、丁寧に一人一人と関わっていくことが大切であることを学んだようである。新しい環境に適応していこうとしている子どもの姿は一人一人様々であり、保育者は、それぞれの姿を受け止めて、ゆっくり見守っていける感性を持つ必要がある。このことがきっかけになってＳ子と教師との距離が近づき、安心感を抱くきっかけとなり、泣かずに登園できるようになった。教師のことも少し身近に感じられたのではないかと思う。

事例２「命との出会い―〝めだか〟が幼稚園にやってきたよ」

対象・時期　５歳児（５月～７月）
場所：Ａ市Ａ幼稚園

―概要―

５月11日、幼稚園にメダカをいただいた。教師は、早速子どもたちとメダカを飼う準備を始めた。鉢の準備、メダカ用の砂の準備、水草の準備などメダカの住みやすい環境を整え、子どもたちと一緒に大切に育てていこうと思っていた矢先、以下のようなやりとりが聞こえてくる。

こどもＡ：「メダカが寝てる。」
こどもＢ：「ちがう。これは、死んどんやって。」

それが、一匹ではなく、次の日も、また次の日も続き、数が減っていった。教師は、なぜ死んでしまうのか、水質が良くないのではないかと、きれいに砂を洗って天日干し、水替えをした。また、水温が上がらないように日陰におく工夫をしたが、水草が枯れてしまうため、日当たりの問題ではないかと日中は直射日光の当たらない預かりの部屋の前から、日の当たる職員室前へと置く場所をかえた。まもなく、保護者からいろいろな情報が寄せられた。その一部を以下に紹介する。

情報１「育った環境の水に左右される」

「小さい頃に育った水によって、大きくなってからその水に対応できるかどうか違うんだって。カルキ抜きを使って育てられたメダカは、そういう水にも適応できるけど、水を汲み置きして、少量ずつ丁寧に水替えされたメダカはカルキ抜きを使った水には適応しにくい。Ａ幼稚園のメダカを気にかけ、家にある水草をもって来てくれた近所の金魚育ててるおじさんが教えてくれたよ。」

写真１　水草に興味津々

情報２「ボウフラがメダカのエサ」

水槽の中の泳ぐ物体を見て、保護者に「先生、これ何」と聞かれた。

「メダカの卵を別の水槽に入れておくと、ボウフラが生まれてしまって…。子ども達は“赤ちゃん生まれてる。くねくねしてる”って騒いでたけれど、物知りの子が“これは違うで、蚊の赤ちゃんやで”と話してました。」

教師がそう答えると、保護者は、「大人のメダカにあげたら大喜びするわ。家ではスポイトですくってあげてるよ。」と答えた。ボウフラがメダカのエサになることを知り、驚いた。ここで教師の気づきを紹介する。

写真２　ボウフラを食べたか確認する子ども達

以下、教師の記録文章である。

情報２でボウフラを見て、「これは違うで、蚊の赤ちゃんやで」といったA児のことにふれていきたいと思います。A児は、これまでの体験でボウフラという生きものを知っていました。まさにこの時、体験と知識が目の前に起きた出来事と合致し、知っていることを友達に伝える機会となりました。A児にとっても周りの友達にとっても様々な気付きや発見の喜びを味わった瞬間でした。生活の中で幅広く経験することの大切さを改めて感じ、どんなことにも無駄がないと実感しました。さて、お母さん方から情報をいただき、その後、早速ボウフラを大人メダカの鉢へ投入しました。投入直後は、あまり食べませんでした。子どもたちは口々に「(ボウフラが) 大きすぎるのかな？」「うーん、お腹すいてないのかも。」と色々考えながら見ていました（写真２)。しばらく好きな遊びを楽しんだ後、数人がメダカの鉢を囲み、中を覗いて「うわっ、全部食べとる。」「ほんまや。」と子ども達の驚く声が聞こえてきました。見てみるとあれだけ、うじゃうじゃいたボウフラがきれいにいなくなっていたのです。
「すごいなぁ。やっぱり、○○ちゃんのお母さんが言った通りメダカってボウフラ食べるんや。帰ったらお母さんに教えたろ。」
と口にする子もいました。実際にその様子を目の当たりにして、大きな驚きと自分の発見を誰かに伝えずにはいられない心持ちになったのでしょう。学んだことを次へ伝えるという「言葉による表現」、「伝え合い」の絶好の機会となりました。また、気が付くと水草を持ち上げ、卵がついていないか探す子もいます。毎朝、卵を確認する私の姿、いつの間にか見られていたようです。メダカはそれ以来一匹も死ぬことなく元気に生活しています。その後、嬉しいことに６月19日、D君が家で生まれた卵と赤ちゃんメダカをもって来てくれた。登園後や戸外へ出る前、給食後等々、気づけばメダカの様子を気にして見ています。

＜考察＞

メダカを飼う準備も整い、子どもたちも楽しみにしていた飼育。しかし次々と死んでいくメダカを見ながら、どうしたらいいのか、保育者と子どもたちだけでは考えがつかなく、保護者からメダカの飼い方の情報を集めた。それが功を奏して次々に情報が寄せられた。上記の２つの情報を含めて本当にその通りなのか、半信半疑であったがメダカの命を救うために子どもも保育者もみんなでその情報に基づき実践していった結果、メダカの命を救うという結果につながった。小さな生き物の命を簡単に犠牲にすることはできないという保育者のメダカに対する愛情、たとえ、メダカが死んでしまうことになったとしても、そうした事態を踏まえた上で保育者も子どもたちと一緒にメダカの命と向き合おうと覚悟を決め、メダカの世話にいっそう気持ちを込めた姿が事例から読み取れる。その保育者の姿から、子どもたち自身もメ

ダカの命にまっすぐ向き合おうとしている姿も感じ取れる。この出来事を境に子どもたちは捕まえたカエル、カタツムリなどを飼おうと思う際にどのように飼えば良いのかをよく考え、よく調べるようになったようである。さらには、逃がすという「別れ」を前提につきあうことの意味も少しずつ分かっていっているようである。

事例３「ハムちゃんが死んでしまった」
対象：時期　５歳児（５月～７月）
場所：Ｓ市ｊ幼稚園

―概要―

クラスでハムスター（ハムちゃん）を飼育していた。その可愛がっていたハムスターがある日死んでしまった。悲しんだ子ども達であったが、みんなで相談し、お墓を作ることにした。ハムスターを土の中へ埋めていると、

こどもＣ：「ハムちゃん天国で友達に会えるかな・・・」
こどもＤ：「元気かな・・・」

という子ども達の会話が聞こえてきた。教師が「ハムちゃんが大好きなひまわりの種、お墓にいれない？」と問うと、みんな「それがいい」と言って、ひまわりの種をハムちゃんの周りにおいて、「天国でも元気でいてね」と手を合わせたあとで土をかぶせた。その後時々、お墓に行く子ども達の姿が見られた数週間後外で遊んでいると「あっ！」「葉っぱがある」その声の方へ行ってみるとハムスターのお墓のうえに大きな葉っぱが出て大きくなっていた。それから子どもたちはお墓に行くとともに、水やりに行く姿も見られた。その数週間後りっぱなひまわりが咲きました。「ハムちゃんがみんなに会いに来てくれた」ととても喜び、そのひまわりはいつのまにか子ども達の中で「ハムちゃんのひまわり」という名前になっていた。

＜考察＞

この事例ではクラスで大切に飼育していたハムスターであることが読み取れる。ハムスターが死んでしまうことになった理由はいろいろ考えられるかもしれない。しかし、大好きで大切に飼育していた生き物が死んでしまった時の虚無感、子どもたちの悲しみを先に受け止めようとしている。そして、その場の空気で保育者はハムスターがなぜ死んでしまったのか。何が悪かったのか。など言葉にしないで子どもたちの思いを大事にしている優しさがうかがえる。この「優しさの感性」も時には必要である。その保育者のやさしさが子どもたちにも伝わっている。お墓を作るだけでなく、そこにはハムスターが大好きだったひまわりの種を一緒に土に埋めたことによりひまわりの花を咲かせた。このことからも毎日水やりをかかさず大切に育て、何とかひまわりの花が咲いてほしいと願うクラスの子どもたちのハムスターへの思いやりが感じ取れる。その言葉が「ハムちゃんがみんなに会いに来てくれた」という喜びに繋がっている。しかし、生き物を飼育するうえで必ずぶつかるこの出来事を、保育者はどのように説明し、それらをどのように受け止めてもらいたいか、自分の中に明確にもっておくことは大事である。

事例４「トマトさん暑いね。いっぱいお水飲んでね。」　―植物とのかかわり―
対象・時期：４歳児（５月～７月）
場所：Ａ市Ａ幼稚園

―概要―

ある日の朝、トマトの芽がポットから抜かれ、水をためていた受け皿に置かれているのを見つけた。

「トマトの芽が抜かれている。」
「子ども達と一緒に大切に育ててきたのに。」
「なんでこんなことに。だれがこんなことをしたのかしら」

教師は、トマトの芽が抜かれていることのみに

写真３　抜かれていたトマトの芽

心がいき、その子どもの気持ちに寄り添うことができなかった。保育室でグループごとにトマトの種をポットに植えて育てていたのであるが、それはトマトの赤ちゃんである種から命が芽吹き育っていく様子を子ども達と一緒に見て、感じていきたいと思ったからである。

Ｅ児：「どうしよう・・・！」
Ｆ児：「あんなにおおきくなっていたのに！」
Ｇ児：「トマトさんかわいそう」
Ｈ児：「もうだめかもしれない・・・」
Ｉ児：「もう一回、植えたらいいんじゃない？」

こどもたちは、上記のようなやりとりを行いクラス全員で話し合い、もう一度抜かれていた芽を土に植えてみることにした。

写真４　トマトの芽を心配する子ども達

ある日、Ｊ児が「太陽が当たっていたからトマトさんのどが渇くと思って抜いたの。」と教えてくれた。実は、教師が受け皿に水をためていて根が下から水分を吸収するようにしていたのだ。そのことは、きちんと子ども達に伝えていなかった。Ｊ児は、水がたまっている受け皿に芽を入れてあげたほうがトマトが大きく育つのではないかと考えたようだった。また驚くことにＪ児の家では水耕栽培を行っているということを後日保護者から聞いた。

保護者の連絡帳より
「先生がお話してくださった日、おうちに帰ってから話をしました。『暑かったのでトマトさんにお水をいっぱいあげようと思ったこと』、『朝見た時と帰りに見た時のトマトの苗の大きさが変わらなくてトマトに早く大きくなってほしかったこと』本人は、いろいろと思うことがあり、してしまったことのようでした。…その週末に借りてきた本は大きな栽培図鑑で、一生懸命見ていました。」

＜考察＞

この事例では、保育室でグループごとにトマトの種をポットに入れて命の芽吹きを大切に育てていた時に起こってしまった出来事である。注目するべきは、保育者が、この様子を見つけ「トマトの芽が抜かれている。」「だれがこんなことを。」「なんでこんなことを。」などトマトの芽が抜かれているという様子のみに心がいってしまっていることである。とりわけ大事な点は、抜かれているトマトの芽は、きちんと水をためている受け皿につけられていたことである。そのことも話し合いの中ではでてきていない。保育者が言っているように、抜いた子どもの気持ちに寄り添うことができず、保育者自身抜かれているトマトの芽が水につかっていることなどを深く感じ取ることができていなかったようである。しかし、これで終わってしまうと抜いたＪ児が悪くなり彼の優しい気持ちに気付くことができないまま、知らないまま終

わってしまうところであった。Ｊ児が自分の思いを「太陽が当たっていたからトマトさんの喉が渇くと思って抜いたの。」という言葉で表現したことが非常に大きな学びをもたらした。保育者にはこうした点に心を向けて感じる感性が必要であると考える。トマトの芽を抜いた意味をＪ児がきちんと保育者に伝え、保育者がＪ児の思いをクラス全員の子どもたちに話したことで、Ｊ児のやさしさにも触れることができた。

事例５「色水の実験」
対象・時期：年少４歳児（６月～７月）
場所：Ｓ市ｉ幼稚園

―概要―

進級当初より、年少児から楽しんでいた色水遊びや、石鹸での泡立てを楽しむ姿が女児を中心に見られた。

写真５　色水の変化を楽しむ子ども達

トライやるウィークの中学生と一緒に色水遊びを楽しんだ際、黄色い花と石鹸を混ぜると赤い色に変化したことに、「すごい！！」「実験みたい！」と、中学生と一緒に驚き感動した幼児。片づけの際には、「明日も色の実験したい」と話していた。そして、ふりかえりの時間に「今日は色の実験をしたのが楽しかったです」と、クラスの友達に話す幼児がみられた。教師が「このきれいな赤い色水、どうやって作ったの？」と尋ねると、幼児は持って帰ろうと置いていた赤色の色水を見せながら、どうやって作ったかをみんなに説明した。すると、これまで、色水遊びにあまり興味を示していなかった男児から「え！すごいな」「ぼくも明日やってみよう」という声が聞かれた。

翌日、昨日の幼児の発見を、写真にして掲示した。

写真６　子ども達の色水遊びの発見を写真で展示

登園するやいなや「そうや！今日これして遊ぶんや」と言ったり、お家の人に掲示を指さしながら色水の作り方を説明したりする様子が見られた。その日も早速“色の実験”をして遊び始める。「この花とこの花を混ぜてみよう」「この花とこの花でこんな色になった！」と、花を選び、試してみる幼児。「これ？どうやって作ったん？」「来て、こっちに咲いている花やで」と、友達が作っている色水を作ってみようとして、友達に聞いたり教えてあげたりする幼児の姿が見られた。振り返りでは、自分が試してみたこと、新たに発見したことなど、みんなに話す姿が見られた。

＜考察＞

庭に咲く花は、季節を感じさせる環境だけでなく、その花柄を摘んで飾ったり、色水を作ったりと、自らの手を加える楽しさを得る契機を与えてくれる。この事例のように毎日の色水遊びに、中学生が加わったことで、黄色い花と石鹸を混ぜると赤色に変化するという楽しさを発見し、驚き、感動につながっている。もちろんそこには、一緒に「すごい」と驚いたり、喜んだりしてくれる仲

間がいたからこその感動である。遊びのふりかえりをした際、

こども：「今日は色の実験をしたのが楽しかったです。」
保育者：「このきれいな赤い色水、どうやって作ったの？」

と、聞き返した。この聞き返しに女児が丁寧に説明をしたことで、あまり色水遊びに興味を示していなかった男児にもやってみたいという動機が生まれ遊びの広がりがでてきている。子どもが身近な植物に対して興味をもったり、親しみを感じたりするきっかけは園内にたくさん潜んでいる。その小さなきっかけに子どもが気づいたときに、保育者がしっかりと受け止め、一緒に驚いたり、保育者も仲間として一緒に経験したりしていくことで、さらに遊びは深まり楽しいものになっていくその過程を大切にしなければならない。

４．おわりに

今回検討した事例は、ほんの一部に過ぎない。しかしながら、自然環境に焦点をあてて研究を進めていくうちに、保育者の感性が子どもたちとの関わりの中で、具体的にどのような重要な役割を果たしているか感じ取ることができた。保育者は五感をフルに思考しながら、感じる心を充分に働かせて、そうした一つ一つの出来事を振り返りながら子どもたちとともに味わう生活を重ねていくことが、何といっても子どもたちの豊かな体験を支えていくことにつながっていくのだと考える。また自然環境の範疇は、人間はもとより今回検討した事例にあるように、アリやメダカといった小動物や、トマトのような植物、そして色水の事例にあるような自然の変化を追体験する経験まで感性でとらえる物事は幅ひろい。そのためにも保育者自身が日々の生活の中で、子どもとともに喜んだり、悲しんだり、「おや！」「なぜ？」と立ち止まったり「おもしろいな」「きれいだな」と心を躍らせ「何だろう？」と心をゆさぶり、心に感じる。この感じる過程を大切にしていきながら、感性を研ぎ澄ましてほしいと願ってやまない。

〈引用文献〉

１）文部科学省「幼稚園教育要領解説」2008年
２）無藤隆『領域　環境』2015年　P67～71

〈参考文献〉

１．文部科学省　「幼稚園教育要領解説」2008年
２．小田豊・湯川秀樹『保育内容　環境』お茶の水女子大学附属幼稚園　平成20年度研究紀要「環境に関する豊かな感性を育む」2009年